

進化論的過程としてのグローバリゼーション

Globalization as Evolutionary Process

George Modelski

Professor of Political science Emeritus in the University of Washington

山田百合子 / 訳

1. グローバリゼーションとは何か:制度論的アプローチ
2. グローバリゼーションは進化的な過程なのか
3. 進化論的アプローチに対する批判と応答
4. これは決定論か?

1. グローバリゼーションとは何か:制度論的アプローチ

この論文が採りあげるのは制度論的アプローチである。すなわち本稿はグローバリゼーションを次のような地球全体を覆う制度の出現を意味するものだと見なしている。その制度とは、世界を覆う自由貿易や超国家的な企業、グローバルなリーダーシップ、グローバルなガバナンス、世界規模の社会運動やイデオロギー、世界世論の今日的な形態などであって、このような制度は全体として進化の途上にあるグローバルなシステムを形作っているのである。

制度論的アプローチ (institutional approach) を理解する最善の方法は、それを「連結論者 (connectivist)」のアプローチと対比してみることである。連結論者のアプローチは、グローバリゼーションを何よりもまず相互依存の状態として理解しようとする。例えば、最近発表されたレポートは、グローバリゼーションを「情報、技術、資本、財、サービス、人々の移動が世界中に拡大することに示される相互連結性の増大」と定義している。(NIC, 2004:27頁) また、トーマス・フリードマン(2000)はグローバリゼーションを市場、国民国家、技術の容赦なき統合だと定義している。こうした見方は連結性を強調するものである。

連結性として理解されるグローバリゼーションが持つ別の側面は、その「開放性 (openness)」である。開放性というのは国家というシステムがもつ特性であって、それぞれの国家は、上記のさまざまなフローをどの程度受け入れているのかに応じて順位付けすることができる。(注1) 連結性の自由な機能のためには開かれた社会がもっとも望ましい。なぜなら連結性が最も栄えるのは、貿易、資本移動、移民、あるいはアイデアや慣行の普及に対して障壁のない場合だからである。それゆえ、グローバリゼーションを捉えるもう一つの見方は、各国を開放の指標によって順位付けることである。すなわち各国が世界システムに対してどこまで協調的であるのかという度合いを測ることである。

グローバルな相互作用を通じて、連結性を計測したり分析したりすることによって、グローバリゼー

ションという現象が持っている内実の多くがあきらかになる。貿易のフローや資本移動や旅行や移民は、たしかにこの世界を強く、時には弱く相互依存的にする。だからこそ研究者は、グローバリゼーションという過程の進展度を経験的な観察をもとにして判断しようとするのである。

実際にこのような連結性を図示してみると、貿易、金融、社会といったさまざまなネットワークが浮かび上がってくる。それぞれのネットワークは、世界システムの構造的特徴を成しているのである。とはいえ、この種の展開にはしばしば変動がみられ、ときには全く崩壊してしまうことさえある。たとえば、良く知られているように、19世紀後半には貿易の拡大にともなって世界平和への希望が喚起されていた。しかしそれは1914年に荒々しく放擲された。それに続いて起こったのは、一見あると思われていたグローバリゼーションに向かう傾向の急速な逆転である。それでもグローバリゼーションの過程が完全に止まってしまったとは言えない。それは単なる小休止にすぎなかった。言い換えればグローバリゼーションは着実に、かつ直線的に進むとはみなされないのである。むしろそれは局所的な上昇がおこるかと思えば、また平準化する長期的な過程とみるほうがよい。いずれにせよ特定の指標上の傾向があるというだけでは、グローバリゼーションを説明する答えにはならないのである。

グローバリゼーションに関する「転換主義者(transformationalist)」のD. ヘルドラ(1999:27頁)が開発したアプローチは、「連結論者」の見方を超えて、グローバリゼーションを歴史的過程 単一の状況というよりは過程あるいは過程の組み合わせ として扱うものである。このようなアプローチを採ることにより、グローバリゼーションは「時間と空間」および「組織」というふたつの次元で表すことができる。こうして作られたグローバリゼーションのモデルでは、世界システムを動かしている個々のフローの強さ、広がり、速度、インパクトの方向といった効果を組織の次元の分析と組み合わせて用いている。組織の次元というのは、グローバルな相互作用(世界基準の新しい構造)の中にあるインフラや制度化の状況によって表わされている。

本稿の筆者は、(当然ながら) 多くの相互作用に関する信頼性のある計測が重要であることは十分に認識しているが、この二つ目のアプローチこそ、進化論的分析に適するという見方に強く傾倒している。「連結性」と「開放性」は、両方とも組織と制度の組み合わせによって生まれるものである。言い換えるならば、(グローバリゼーションとは) さまざまなフローを創出し、かつ運営する組織、そのフローを促進し、かつ管理するレジーム、また、そのフローを維持させる相互信頼のマトリックス、さらにこれらのフローを導く知のシステムから派生するものなのである。簡潔に表すならば、「政治的グローバリゼーション」は、古典的・帝国主義的な形式を嚆矢とし、グローバルなリーダーシップを経て、今や次第にグローバルな組織へと、世界の秩序構造の進化をたどっているのである。

ここで、グローバルな変化のタイプについて、その違いを明らかにしておこう。今、述べたように、グローバリゼーションは全地球的な見方に立った組織の組み立て(発生)に関わるものである。地球上の人間の属する組織が、世界レベルで社会的調整をおこなうことや、そのような組織が出現することはあきらかにグローバルな変化である。しかしグローバリゼーション以外にも、社会の世界的な変化はいろいろと起こる。さらに、われわれの住む地球には、自然界の変化もある。このなかには自然の力によるものも、また、 気候変化がグローバリゼーションによる可能性があるとするれば、 人工的に引きおこされるものもある。このような変化も、今後の地球の予見しうる変化のスケジュールに対して深刻な問題を投げ掛けるであろう。この種のグローバルな変化は研究に値するが、しかし本稿の研究範囲ではない。

制度論的アプローチは、転換(transformation: 構造変化)という事実注目する。(それゆえ転換主義的アプローチでもある。) さらに進んで、このようなグローバルな変化を説明しようとするものである。

そのような説明の基盤となっているのは「学習(learning)」原則である。すなわち、人間は、なによりも学習能力を持つ種であり、学習が好適な条件のもとでは、遺伝的にプログラムされた種的な過程として、問題解決型のアプローチをするのだが、もともとそれは、より良い世界をめざす人類の不撓の試みの中に潜んでいる。この試みは、多くの回り道と偽りの約束に満ちた行程であったにもかかわらず、これまでのところは人類をはるか遠くまで導いてきた。学習の過程はまたモデル化し、シミュレートし、未来に投影することもできるのである。

先に言及したNIC報告書は、グローバリゼーションを「メガ・トレンド」、すなわち「2020年の世界のその他の主要なトレンドを大きく作り変えるほどの普遍性を持つ力」、あるいは、世界のさまざまなフローに関する集計されたデータの助けを借りて視覚化し得るグローバルで巨視的な傾向だと位置付けている。本稿で採用したアプローチでは、グローバリゼーションは「過程」より正確に言うならば諸過程の集合体とみなしている。すなわち、過去から未来にわたって傾向則として把握し得るだけでなく、理解・分析し、理論化し、検証は必要だがより大きな説明の枠組みの中で位置づけして、予測にも使える出来事の連鎖だとみなすのである。

過程とは、本稿の分析のように、停滞よりも変化を、構造よりも流動化をより重視する分析にとって鍵となる概念である。過程とは、問題解決的な出来事の連鎖を浮かび上がらせるという意味で、現実を認識する独特な方法である。

過程とは、単なるトレンド 流れ、傾向、あるいは一般的な動向 というより、「プログラム化された調整を通じて現れる互いに繋がりがあった一連の展開」なのである。サイバネティックな階層に従って配列された四つの自己相似的、かつ相対的に自律的でグローバルな制度的諸過程、すなわち経済的、政治的、社会的、文化的過程が、グローバリゼーションを形作っている。

2. グローバリゼーションは進化的な過程なのか

グローバリゼーションは、われわれが今、生きている時代の決定的特徴である。世界が「小さくなっていく」過程だと言う人もいるし、連結性が増大する側面を強調する人たちもいる。しかし、われわれの見方からすれば、グローバリゼーションとは、何よりも「地球規模の諸制度の出現」の過程である。これはあきらかに制度論的アプローチに従う定義であるが、そこでは「連結性」や「開放性」は原因とも結果とも見なされている。

論者の中には、グローバリゼーションをもっぱら経済的な過程として扱う人もいる。あるいはまた、グローバリゼーションは本質的に今日的な現象であり、明らかに技術的な進歩の結果だとみなす人もいる。さらに由来はともかく今日の生活にとって不可欠な条件だとみなす人もいる。本稿は、グローバリゼーションを、歴史的で、トランスフォーメーションで、さらに四つの次元を持っており、世界システムの進化の一つの相をなす過程だとみなしている。(注2)

グローバリゼーションは時間的 = 通時的な過程である。したがってそれは歴史的な過程でもあるが、その意味は、それを理解するためには、その起源に遡る必要があるということであって、大雑把に言うならば、その始まりは西暦1000年頃に置くことができるであろう。(注3)これらの始まりは、ユーラシア大陸を横断するシルクロードであるかもしれないし、最も顕著な例としてはジンギス・カーンとそのモンゴル人後継者達によって13世紀に試みられた世界制覇の企てかもしれない。もっとはっきりとした始まりは、その後何世紀もおこなわれた大洋航海を基盤とする諸活動に見られる。おそらく次の1000年が終わるまでは、その最終的なかたちを予想することは、われわれには不可能であろう。グローバリゼー

ションはまた、人類が一度しか経過していないという意味で歴史的試みでもある。したがってわれわれは、それを(多数の例をもとめるという意味では)一般化できないのである。われわれにできるのは、時間を通して知っているこの1回限りの出来事を追跡することだけである。あるいはまた、それを構成する過程と要素の集まりに還元することだけである。

グローバリゼーションはトランスフォーメーションで制度的なものである。なぜなら、それは地球的な規模のデザインの展開とでも呼び得る過程を一步一步たどってきたからである。1000年前、人類は四つか五つの地域毎の集合体として組織されていたに過ぎず、お互いの接触は、基本的には低いレベルに止まり、共通の組織、規則、知識を持っていなかった。その後、相互の情報の量が増え、交通のコストが下がり、集合体間の接触は格段に増加して、共同の問題に対処するための組織や規則も例外的なものではなくなった。人間がその他の人間と関わる諸制度について言えば、地球規模でのみならず、局地的レベル、国家レベル、地域レベルでもトランスフォーメーションを行ってきたのである。

最後に、グローバリゼーションは多次元の、より正確にいうならば四つの次元を持つ過程である。言い換えれば、奴隷制や資本主義といった「世界史の諸段階」を一元的に画する簡単な方法はない。広く認められているように、グローバリゼーションは、自由貿易、世界商業、資本移動といった旗印のもとに劇的な拡大を遂げてきた。また、多数のトランス国家的企業を生み出しつつ、これら全てを管理し、統制する入念に作り上げられた規則や規制を生み出してきた。しかしグローバリゼーションには、それ以外の政治的次元もあれば、グローバルな社会運動、世界規模の文化的トレンド、共通の関心事に対応するための世界世論の出現などとも関わり合いを持っているのである。

グローバリゼーションの過程を考える適切なレベルとして、本稿のアプローチは、人類を分析の基本単位として取り扱う。したがってこれは、人類が地球上にとどまっているかぎりでは全地球的なアプローチとなる。また種間の競争は基本的に取り扱わず、もっぱら人類という種の内部の過程にのみ目を向ける。そのような過程には、さまざまな主体が関与し、成功するものもあれば失敗するものもある。そこに物語(story)が生まれるのである。

グローバリゼーションが歴史的で、構造変化を引き起こす、多次元の一連の過程だとするならば、それが進化過程でもあることは容易に見て取れよう。ホモ・サピエンスの進化は、長い歴史的な過程であり、今日では遺伝情報の助けを借りることで、その過程をより辿りやすくなっている。遺伝的素質は、性的淘汰や環境圧力によって絶えず変化しているのである。われわれが関心をもっている諸過程、すなわち政治、経済、社会、文化におけるグローバルな構造変化の過程(Held, McGrew, Goldblatt, and Perraton: 1999)は進化論的な枠組みによって、より詳細な説明が求められているのである。

このアプローチの前提となっているのは、広汎な集団選択の過程を通じて社会の進化を実現させるプログラムが存在しているという考え方である。なぜなら人類は、次々と連なる一連の学習アルゴリズムを通じて多段階の自己の組織化を通時的に行う傾向をもっているからである。プログラム化された調整 基本的には学習アルゴリズム が「過程」という観念の中に本質的に内在している。自己組織という考え方の中にも、プログラムの観念が含まれている。グローバルな過程は進化の連なりであり、探索と選択というダーウィンのようなアルゴリズムにしたがってプログラムされている、と想定することができる。優先順位をとる問題に対処する方法が探索と選択であって、その結果は定期的な制度革新となる。各時期はグローバルな大問題に対処するための一群の革新と密接に結びついている。このような見方にとって鍵をなす選抜や選挙に際しての選択であるとか、変動に際しての革新といった観念は、社会科学にとってはおよそ目新しいものではないが、本稿のアプローチでは、それらは、諸過程の単位とされ、世代という言葉で示されるような特定の期間において規則的な連鎖を成して生起するもの

とみなされている。それぞれの革新はS字型の学習過程の始まりとなるのである。

四つの制度的過程

次に、制度論的な考え方に則して、互いに密接に関連している四つの制度(あるいはシステム)の構築過程の集積として、グローバリゼーションを説明してみよう。「表1」は、進化現象としてのグローバリゼーションを構成している四つの過程を、列に並べて示している。これらの関連性を示す一つの特徴として、諸過程の各々が発現する特徴的時期の長さが、ある一定の関係をもっていることに注目してほしい。すなわち、「表1」を右から左へと見ていくと、時期の長さは、倍々になっているのである。このようにある一時点をとってみると、グローバル・システムを形作っている四つのシステム構築過程は、それぞれが異なる進化局面に位置していることになる。

表1 グローバルな制度的プロセス(グローバリゼーション)
(西暦930年～2300年)

グローバリゼーション 期間/周期:2000年	グローバル・コミュニティの台頭 1000年	グローバルな政治的進化 500年	グローバルな経済の進化 250年
930年: グローバルシステムの出現	前提条件	帝國的実験	宋による突破
		世界帝国の失敗	商業航海革命
1430年: グローバル・システムの地図化		グローバル・リーダーシップ	グローバル貿易の枠組み
		グローバル・コア地域	産業化の離陸
1850年: グローバルな社会組織の登場	民主主義的世界	グローバル組織	情報化の時代
		1080年: グローバルカバナンス	
2300年		統合	

四つの制度的過程とは、グローバルな経済の進化、グローバルな政治的進化、グローバルなコミュニティの台頭、および進化するシステムの中心的様相を定めている集約的過程としてのグローバリゼーション自体である。それぞれの過程は、一個の主要な制度革新を、探索、探求、選択、増幅(「結実」)させる。すなわちグローバル経済は、商工業の発展段階を通じて次々とその姿を変え、現在では、コンピュータ

とインターネットを基盤とする情報化の段階に入っている。これこそ現在のグローバリゼーションの一番の特徴とみなされているところである。

これに対してグローバルな政治システムは、後述するように、帝国主義的実験や、核武装のような学習段階を経て、グローバル・ガバナンスの試みへと進んでいる。グローバル・コミュニティは、民主主義を基盤として構築される形で台頭してきていて、そのスローガンは「民主化なくしてグローバリゼーションなし」ということになるであろう。なぜならある種の民主主義の土台無しにコミュニティの維持は考えられないからである。

この過程で構造の頂点となるのは、全てを包含し、全体に首尾一貫性を与える覆いとしての役割を果たすグローバリゼーションそのものである。この意味でのグローバリゼーションもまた、それ自身、われわれの知っている過去の時代の世界システムと比べるならば、ひとつの革新である。それはまた、地球人口の増加が必要とした革新でもある。事実、それは画期的な革新であって、その進捗状況は進化的学習の各要素を取り込みつつ生じつつある諸過程として図式化することができよう。われわれはグローバリゼーションの進捗度を、必要な諸要素が正しい場所に収まっていくありさまによって測ることができるかもしれない。グローバリゼーションは、それが画期的なものであるがゆえに、諸所の革新クラスターが根付くためには時間がかかり、その過程は長期的なものとなる。「表1」においては、その期間は2000年とされている。われわれはいま、道半ばをすこし過ぎたあたりにいるのかもしれない。

ケーススタディ:政治的グローバリゼーション

これまでの議論を、より具体的なものにするために、グローバリゼーションを形作る諸過程の集合の一つ、すなわちグローバルな政治の進化(言い換えれば政治的なグローバリゼーション)について詳しく見てみよう。(注4)この過程の単位となるのは、その他の過程の場合と同じように、一つのタイムスパンである。世界システムの時間は連続的に絶え間なく流れるものではなく、不連続で粒々の形をとっている。それは世代の数で数えることのできるような、ある特定のタイムスパンにおいて新展開がみられる時間なのである。

政治的グローバリゼーションは、およそ16世代(約500年)にわたる特徴的なタイムスパンをもっている。それぞれの期間は、主要なグローバル諸課題の集合と、これに対する制度的諸革新の開始と普及によって定められる。「表1」の第3列に示されているように、各次の制度的諸革新は、帝國的実験、グローバル・リーダーシップ、およびグローバル組織、と名付けることができるであろう。

この分析の焦点は、グローバル・レベルの諸組織にある。そのような組織は、世界社会を秩序づけるための必要条件であるが、ある特定の瞬間に一気に出現するものではなく、政治的グローバリゼーションの持続的過程の結果としてのみ形成される。この節において、われわれは次のように問いかけよう。政治的グローバリゼーションは、なぜ、そしていかにして、進化論的見地から分析しうるのか。政治的なグローバリゼーションは、グローバルな政治的進化の別名にほかならない。それは人類の集合的な組織における変化を記述し、学習システムとしての人類という文脈において、探索および選択というダーウィンのような学習アルゴリズムが働いた痕跡をたどることに等しい。

政治的グローバリゼーションは、過程、時間、変化、そして多元性がもつすべての基本的な特徴を、グローバルな政治的進化と共有している。進化論的アプローチは、追加的ではあるが重要なもう一つの特色を与えてくれる。すなわち進化論的アプローチは政治的なグローバリゼーションに変化の内発的動因を提供するものである。それはテクノロジーという「機械仕掛けの神(デウス・エクス・マキナ)」に頼

ることなく、しかも経済、社会、文化において同時発生的、あるいは先行発生的な諸展開にしかるべき注意を払いつつ、グローバルな政治的变化を引き起こすメカニズムを明らかにしているのである。

「表1」は、1000年にわたるグローバルな政治的進化の経過の概要を表にしたものである。この表は、政治的グローバリゼーションの時間表でもあり、同時に、未来の経過についての予測にもなっている。もちろんこれはごくごく大まかな絵柄にすぎない。1000年も遡るとはとんでもない、と思う向きもあるかもしれないが、とはいっても印刷術や羅針盤、そしてモンゴル人がヨーロッパにもたらした火薬などがなければ、このような変化が起こり得たとは考えにくい。その主たる道筋は、あの「長い16世紀」において確実にあったとして、一般に周知のものになりつつある「グローバリゼーションの歴史」に一致している。しかし現在から未来を見通すならば、この表は、われわれのこの世紀こそが、政治的グローバリゼーションにとって重大な 決定的な 期間であるかもしれないことを示唆している。

「表1」は、グローバルな政治の進化を、より高次の制度レベルの過程として提示している。すなわちそれは、古典時代から受け継がれてきた伝統的な帝国の形態を離れて、グローバルなリーダーシップの制度化を経由し、さらにグローバル・ガバナンスへ向かうという、集合的な組織の新形態と世界規模の構造変化との追究過程を描き出しているのである。なお、グローバルな政治の進化過程は、グローバルな政治の長波と歩調を合わせているために、政治的グローバリゼーションのそれぞれの期間を形作っている四つの長波は、政治的グローバリゼーションのそれぞれの局面にもなっている。たとえば第1期の英国のリーダーシップは、「グローバル・リーダーシップ」の期間にとって決定的な局面となった。

グローバルな政治の進化は、長波 (long cycle) よりも一段高次の学習過程となっている。それがグローバリゼーションの過程だといえるのは500年におよぶタイムスパンの中においてではあっても、世界規模の政治的諸制度の創造に関わっているからである。それが政治的グローバリゼーションの一つだと言えるのは、いくつもの相互関係や集合的事業を縫り合わせた政治的構造の形成を説明してくれるからである。古典時代においては、政治的相互作用は局地的なものであるか、あるいは地域的なものに限られていた。ようやく西暦1000年頃になって、相互作用する諸主体（征服者、貿易商人、探検家）が地球規模のレベルで出現し、グローバルな相互作用の層 (layer) を創り始めた。この過程を個々の主体のレベルで駆動していたのは、言うまでもなく政治的競争の長波であるが、より高次の制度的レベルで見れば、それらが縫り合わさってグローバルな政治的進化となるのである。

西暦1000年頃に生じた近代化の開始以来、グローバルな政治的進化は、「帝国化の実験」を試みる過程で、また部分的にはモンゴルの世界帝国の試みを打ち負かす過程を通じて、グローバルな秩序の技術的諸前提条件を整えていった。グローバル・リーダーシップの制度が形作られた期間（およそ西暦1430年から1850年ごろ）には、グローバル組織の海洋交通に基盤を置く中核 (コア) が、帝国化を推進する大陸に基盤を置いた挑戦者たちを打ち負かしながら出現したのである。英国が主導する二つの長波は、この構造が選択から増幅に移行する過程で生まれた成熟形態である。「表2」で詳細を示すように、現時点は1850年以降の「グローバル組織」形成の段階にあたっており、この動きはもう2~3世紀のうちに完結するであろう。第1期が組織の無い（あるいは組織化に失敗した）期間、第2期が最小限の組織化の時代だったとすれば、第3期は（第4期に完成するはずの）適切な構造を選択する期間となる。適切な構造というのは、たとえば人類の生き残りに関わる諸問題、とくに核兵器と環境からの脅威に関する諸問題に効果的に対処しうる能力を持つような構造でなければならない。この第3期（「グローバル組織」）は、疑いもなくクリティカルな時期となる。なぜならば、本稿の枠組みからすれば、この期間は、新しい形態の制度的革新を「選択する」期間となるからである。現時点が含まれるこの期間は、まさにその準備的諸局面（「コミュニティ構築」）のうちの第2局面に入っていて、グローバルな政治に対して、グローバル・ガバナンス

のための民主的基盤の構築に集中すべきだという問題提起を行っている。これによって今から1世紀後に来ると期待される、この過程の次の局面(選択)における、重要な制度変革のための基盤 - すなわち統合という下位構造 - が形作られるであろう。

それ以降の予測は、次のとおりである。現代の米国が果たしているグローバルな役割は、英国が経験してきたものの単なる繰り返しではない。なぜなら19世紀中期以降、グローバルな政治は、新しい、恐らくは民主的なグローバル組織への移行期に入っているからである。しかし21世紀初頭の現在、われわれはいまだにこの移行の第2の局面、すなわち協力的、あるいは連帯的な局面にとどまっていて、その移行の完了は21世紀半ばまでかかりそうである。この第2局面では将来のグローバル組織を具体化するための統合の枠組みが形成されるであろう。政治的グローバリゼーションの力が加わっていくとともに、たとえば多数派の投票ブロックや拒否権などを通じたグローバル組織の統制力(つまり制度的権力)の確立が組織的リーダーシップにとってますます不可欠の条件となっていくだろう。このような枠組は民主的なコミュニティの機能を助けるものである。22世紀には多数決型民主制のグローバルな基盤の上に、より効果的なグローバル・ガバナンスのシステムが出現してくる可能性が高い。

主体レベル(agent-level)のグローバルな過程

グローバリゼーションは諸過程の集まりであり、その重要な特徴は、その影響範囲の広さにある。このような過程は何世代どころか何世紀にもわたる深淵な連鎖(grand sequences)をなしている。その期間の長さゆえに観察者にとっては難解なものとなり、日々の実際にどのように関係しているのかという疑問が生ずるのである。

これまで概観してきた四つの制度的過程は、それぞれの中に、より短期的な、主体連鎖(actor-sequences)を含んでいる。それらの諸連鎖は自己相似的でありながら触媒となって過程の活性化に貢献している。すなわちグローバル経済の進化は、新たな主導産業部門が次から次へと開花することで推進される。記憶に新しい例でいえば、蒸気機関による鉄道や航路に始まり、コンピュータによって活性化された通信網にいたる展開がある。グローバル政治の進化は、過去500年間、グローバル・リーダーシップをめざす列強間の競争を触媒として推進されてきた。グローバル・コミュニティは、民主主義的な慣行の枠組みの中でグローバル・レベルでの協調的ネットワークの台頭という前提があってはじめて可能になる。グローバル・システムの組織規範は、新しく生まれてきた情報と学習の複雑なネットワークから力を得た世界世論の高まりによって活力を得ている。

「表2」は1850年以降の以上の四つのグローバルな主体レベルの諸過程を表している。これら四つはすべて学習の連鎖である。すなわちグローバル経済における新主導産業、世界政治の中での新世界大国、さらにまた社会運動や世界世論の新しい流れ等々の台頭は、すべてそのような試行(とその結果)として説明できるのである。それぞれの学習過程は、二段階の準備の局面をもち、その中で集散的な決定の選択メカニズムが働く第三局面の基礎を形成して移行が実現する。その後に全過程を完結させて「定着」をもたらす第四の局面が続くのである。われわれの見るところでは、米国の(学習の)長波は1850年から1975年に至る期間続いていた。その中でグローバル・リーダーシップの土台を作った準備局面は1914年から1945年の期間であった。グローバル・リーダーシップが完全に確立したのは1940年以降にすぎない。そこから始まった米国の(ゆるやかに制度化された)「在任期間(term of office)」は、1975年を過ぎて、(われわれの時間表によれば2026年以降に)別の選択がなされるまで続くだろう。したがって米国の長波という観点からすれば、最初の学習連鎖は1975年に終了するが、米国の「在任期間」は、われわれの説

明枠組みにしたがうならば2026年まで続くだろう。もっとも、この残り期間は「レイムダック」のように見える可能性がある。というのはグローバルな政治システムは、(選挙キャンペーン中のそれと似たような形で)競争の新しいラウンドのための条件を、この間に整えることになるからである。

表2 主体レベルのグローバル過程 1850～2080年

	グローバル・システムの プロセス 期間/周期:500年	グローバルな社会活動 250年	グローバル政治の長波 120年	K波 60年
1850	世界世論 グローバルな諸問題	民主主義の普及 早期導入者	LC9:米国 問題提起	K17:電気・鉄 / 離陸
1878			連合結成	高度成長
1914		民主主義的な中核	マクロ的決定: 第1次-第2次大戦	K18:電子・自動車・航空機 / 離陸
1945			実施	高度成長
1975	グローバルな連結性	民主主義的転換	LC10 アジェンダ設定	K19:コンピュータ・ インターネット / 離陸
2000			連合形成	高度成長
2026		統合	マクロ的決定	K20:集合知?
2050			実施	
2080	グローバルな組織化	民主的コミュニティ	LC11 アジェンダ設定	

以上の四つはすべて主体レベルのプロセスであって原理的にはS字型のロジスティック曲線であらわすことができる。グローバル・リーダーシップにおけるポルトガル長波の経験的分析をみると、グローバル・システムの最初の構成要素を作り上げたポルトガルの学習過程は、まさにS字型だったことがわかる。(Devezas and Modelski 2006)近代にみられた主導産業部門の台頭と低落に関するわれわれの研究も、同じような結果を得ており、グローバル経済を形作るグローバルな重要性をもった活動はS字波の継起となるという見方を強く支持している。(Modelski and Thompson 1996)同じことはグローバルな民主的コミュニティの基盤を作る民主化の過程を通じて普及していく民主主義的な慣行に関してもあてはまる。すなわち、より詳しくみてみると、グローバリゼーションは、多数のS字型の成長曲線をな

す 学習サイクルの連鎖的なカスケードの形をとって、くりかえし現れていることがわかる。この学習サイクルは、グローバリゼーションをその根底のレベルでドライブしているのだが、実はより高次の諸進化過程によって進路を定められているのである。

グローバルな諸過程： 民主化、グローバル経済、世界世論

「表2」は、長波を中心とするグローバルな政治プロセスに加えて、三つの相互に関連する共進化過程、すなわちコミュニティ、経済、世界世論に関連する諸プロセスを示している。このような諸プロセスは主体レベルでのグローバリゼーションを構成しているが、制度レベルでの発展にも触媒作用を及ぼす。それらのおのおのについて手短かにコメントしてみよう。

民主化は、諸主体の民主主義的行動によって推進され、(反民主主義的勢力によって妨害される)グローバルな社会過程であり、250年を周期(期間:period)として、グローバルな規模で民主主義的慣行を普及させるが、現在は「民主主義的移行」における決定あるいは淘汰の段階にある。すなわち民主制が世界的に多数派として確立して将来の民主的ガバナンスのための基礎が築かれるようになる転換点をちょうど過ぎたところに来ている。人類が民主主義的慣行の諸要素を身につけるようになるグローバルな進化過程は、世界人口のうちで民主制の下に暮らすことができるようになった部分の割合がどのように増加してきたかを示す学習曲線によって表現することができる。最初の局面、すなわち(約10%のレベルの)早期導入者の局面は、第1次世界大戦前の数10年間に展開した。その後1975年までに、(40%に達する)民主主義的な中核が出現し、20世紀の終わりには、世界人口の中で多数派の地位を占めるまでになった。

1850年以降、民主化過程は闘争的で競合する一連の運動に直面してきた。第1次世界大戦の前にはアナーキスト/ニヒリストの集団が、20世紀のかなりの期間にはファシストとコミュニストの勢力が台頭し、1970年代の終わりからは、恐らくアラブとイスラム世界での展開がそれにあたるだろう。これらは民主主義への否定的反応の連鎖とみなすことができ、民主主義的な価値と慣行の普及に対する抵抗となっている。これらの初期の試みは、グローバルな支持を持続的に獲得することには、あきらかに失敗してきた。最近顕著になっているのは、過激なイスラム教徒の運動が代表している挑戦だが、その中には古典的なイスラム帝国にその起源を持つ新たな「カリフ制」の設立を望む動きさえある。より長期的な展望に立つならば、民主化は「再組織化の時代」の基盤を作るものといえる。(Modelski 2006)

世界列強の興隆と衰退(グローバルな政治進化を駆動する長波)は、経済的グローバリゼーションの駆動力である主導産業部門の興隆と衰退の波にあたるK波と並行して進む。どちらの長波も少なくとも革新(イノベーション)と選択(権力闘争あるいは市場競争)を表しているという意味では、進化的過程である。K波が世界列強の内部にまず発生したことから見ても、それらは自己相似性を持ち、同期しており、入れ子状をなしている。K波はさらに、経済的グローバリゼーションに必要な手段を提供するとともに、グローバルな経済的進化の推進力ともなっている。

コンピュータ インターネットのK波(すなわちK19、「表2」参照)は米国で離陸した。より正確に言えば、1973~75年頃のカリフォルニアのシリコンバレーで始まった。このK波は、いったん振るい落とし(淘汰)を経験した後、2000年頃から高度成長期に入り、今後2~30年は続くと思われる。このK波は、グローバル経済の形成や再形成を行う過程で、主に米国の企業が先頭を切る形で革新的エネルギーの噴出をもたらした。これによって米国経済の生産性は上昇し、その主導的地位を(1980年代に、それが「下降中」だとしていた人々の見方に反して)新たなものにした。第1次大戦時と第2次大戦時には、K17とK18が米

国の体力をつけたのに対し、K19は「軍事革命」を誘発して、米軍が他国に先んじて精密誘導兵器を装備することを可能にするとともに、米軍のグローバルな展開能力を高めることに貢献したのである。しかしながら2000年を過ぎて、K19は「高度成長期」に入り、その利点は早期導入者から後発組へと急速に移りつつある。米国以外の生産者たちもコンピュータ製造やソフトウェア制作を修得して、いまでは携帯電話やインターネットの爆発的普及の真っ只中にある。米国の比較優位は減退し、競争が激化して、中国、インド、ブラジルなどが新しい生産地として出現する一方、ヨーロッパや日本などの先発国は設備の入れ換えを迫られている。

主体レベルのグローバル過程の四つ目は、1850年以降に見られるようになった、グローバルな諸問題を提起して議論する「世界世論(world opinion)」「オピニオン・リーダーやメディアや学習する世界の産物」の台頭である。その先例はルネッサンス、あるいは啓蒙主義に求めることができよう。21世紀の初めから世界世論は、グローバルな連帯の発見やルール制度化を促進するグローバルな連結性の局面に入っている。それはグローバルな安全性と人類の存続に関する共通の利害の認識と共に進展し、22世紀の共同行動の基盤を形作る過程でもある。世界世論はグローバリゼーションの知的な基礎となる。すなわちグローバルな諸問題を明確にし、グローバルなアジェンダの設定を助けるものなのである。

3. 進化論的アプローチに対する批判と応答

長期の社会的過程に関する進化論的分析は、かなり以前から行われており、いくつかの系統があるが、いずれも批判を受けており、その批判の多くは最近のものである。Giddens(1984: 231-3, 243頁)は、社会科学における「進化論」が独自の意味をもちうるためには、以下のような特徴を備えていなければならないとした。

- (1) 生物学的進化との間に少なくともなんらかの概念的連続性が推定されている。
- (2) 漸進的变化という以上の何か、すなわち「変化のメカニズム」が特定されている。
- (3) その中で変化のメカニズムがある特定の種類の社会組織の「置き換え」に結びつけられているような、「一連の発展段階」を跡づけている。
- (4) 「社会変化のメカニズム」とは、「人類史の全体」について妥当するような仕方での変化の説明を意味するということが示されている。

彼は、以上の基準についてかなり詳しく検討したあと、「進化主義(evolutionism)」には不足しているものがあることに気付き、その理由の一半は、世界史は「世界成長の物語(world-growth story)」ではないということにあるのだが、「進化論一般、あるいは、とりわけ史的唯物論の欠陥は修復可能だとは思えない」という結論に達した。

Giddens(同、238-9頁)の議論でとくに興味深いのは、「歴史は世界成長の物語ではない」という以下の記述である。

『ホモ・サピエンスの歴史は、より正確に描くならば次のとおりである。ホモ・サピエンスがいつ出現したかという点については、まだ誰も確信が持てないが、確かなのは、人類の存在期間の圧倒的大部分で、人類は小規模の狩猟採集社会で暮らしていた、ということである。この間、社会変化にも技術変化にも進歩の跡はほとんど認められない。つまり「定常状態」にあったというのが、より正確な説明であろう。

その理由については多くの議論の余地があるものの、ある時点で階級分化した「文明」が、最初にメソポタミアで、続いてその他の地域にも出現した。しかし、それ以後の比較的短期間の歴史は、文明の継続的な上昇を特色とするものではない。むしろトインビーの描いた、諸文明の上昇と下降、およびそれらと部族的酋長制との衝突という図式の方がよくあてはまる。このようなパターンは、西欧がグローバルに卓越した地位に立ったことで終焉した。西欧の台頭は、「歴史」に対し、ほんの2、3世紀という短い期間を隔絶して、それまでとは全く異なる足跡を残した。近代世界は、それ以前の世界との継続というよりは断絶から生まれたのである。』

グローバリゼーションの進化論的説明は、もちろん「世界史」ではない。ただしそれは世界システムの最近の経験に社会科学が取り組むための演習台を提供する。とりわけグローバルな組織の構築や運用についてはそうであろう。とはいえ、われわれは、Giddensのいう「必要条件」に注目したい。彼が最近、グローバリゼーションに関する重要な著作者の列に加わったことを思えば、注目の必要度はさらに大きくなる。いまや彼は「モダニティは本質的にグローバル化する」(Held and McGrew 2000 : 60頁)と述べるに至った。これはグローバリゼーションそれ自体が、過去との断絶として理解されるべきであって、進化過程の産物として理解されるべきではない、ということの意味している。

われわれは、Giddensの最初の必要条件に応える形で、本稿での分析の単位を、進化の軌道にある人間という種に、とりわけホモ・サピエンスにとっている。この選択は、人間社会を研究対象としているほとんどの社会進化論的な考え方--それらに対してはGiddensの批判がまさしく当てはまると思われる--とは、きわだった対照をなしている。本稿の説明の重点は、(世代的な)変化の(種全体に及ぶ)プロセスに置かれている。それは変異と淘汰に基づく普遍的なダーウィン理論の諸概念によって分析されているのだが、本稿では当然、協力や共生にも注意を払っている。

進化プロセスの効果的な説明の鍵となるのは変化のメカニズムである。本稿の分析では、それは、(Giddensの批判する)「適応」ではなく、進化的学習なのだが、その理由は、「すくなくとも生活の領域では、進化は本質的に学習過程である」(Jantsch 1980:7頁)とわれわれが考えているからである。(注5)グローバリゼーションという包括的な過程をも含めて、ここで考察されている諸過程の各期間は、局面にわかれた進化的な学習過程(あるいは恐らくはJantschの用語にいう「ウルトラサイクル」(Jantsch 1980 : 195頁))であって、プログラムされた時間構造を持っている。すなわちそれは、その一般名を変異、連携、選択、敷衍という四つの局面(最初の二つは「準備」局面で、残りは「決定」局面でもある)から成り立つ事象の連鎖である。これら四つの過程のすべては自己相似的(同じ時間構造を持つが、ただし期間の長さは異なる)である。グローバリゼーションの四つの過程のそれぞれの期間(「表1」)は、四つの局面から成り立っており、それぞれの局面は、その中に入れ子状になっている主体レベルの諸過程にとって一つの期間を構成する。各過程の決定的局面は、常に第三の(選択)局面、すなわち決定局面(たとえば、グローバル・リーダーシップにおける「英国I」)である。入れ子になっている学習過程が進化的変化のメカニズムなのである。

第三に、われわれの説明ではグローバリゼーションを、変化のメカニズムとしての進化的学習が、プロセスの時間構造や、特定の種類の社会組織の置き換えの説明となるような、発展プロセスにおける画期的段階と位置づけている。顕著な例をあげると、民主化の進展は、非民主的な形態を置き換える代替過程として見ることができる。「表1」と「表2」に記載した諸プロセスは、進化的学習の展開の物語となっている。その物語の主要な諸部分は、経験的なテストに耐えて成功してきているのである。

第四に、グローバリゼーションの研究として提案されたタイプの分析と変化のメカニズムは、人類史のすべての領域に対して潜在的に適用可能であり (Modelski 2000) また実際に適用されている。(その結果の要約については Devenzas and Modelski 2003を見よ。)これらは社会変化の主要なメカニズムであって、それ自身で人類の歴史と、その豊かさを説明するものではないが、首尾一貫した「世界成長の物語」を語ることを可能にしている。(例えば、World Cities: 3000 to 2000 (Modelski 2003)のような世界の都市化の説明。その中でグローバリゼーションは一番最近の部分となる。)世界システムの進化は、断絶 (いわゆる暗黒時代) と共通の遺伝子基盤に基づく継続の両面を示す世界の成長物語である。これはGiddensが名づけたところの「定常状態」(異なる大陸間の移動や氷河期を含むものである)と、世界システムの組織形成の双方を含む時間的スパンにおけるシステム構築のための革新の連鎖でもある。

最後に、Giddensは一般の「歴史」の進化論的分析が、「史的唯物論」とその世界成長の負債を引きずっていると見なしており、彼自身はグローバリゼーションが主として世界経済の動きに関わるという考え方を拒否している点に注意しよう。グローバリゼーションの経済的要因を重視する見方は、当然ながら広く普及している。それが世界システム分析と結びついた場合には、「グローバル化」しつつある現代の世界システムは、16世紀に西欧で興り、今や世界中に広まった「資本主義世界経済」の産物であるとする見解になる。この見解は結果的に「資本主義がグローバリゼーションの原因となった」という主張を捨てていない。この主張はグローバリゼーションの、より一般的には自由貿易体制の批判者、市場開放や多国籍企業の力を恐れる人々、あるいは代替的な世界秩序を唱道する人達の主張と無理なく調和する。しかしながら実際にはこの見解は、Giddensの「近代化」と異なるわけではなく、「資本主義世界経済」という見地もまた、グローバリゼーションと「西欧化」の間の独自のつながりを想定していることになる。

4. これは決定論か？

本稿ではグローバリゼーションを「プロセスの構造 (process structure)」、すなわち世界の組織化の新たなレベルを創り出すようなプロセスの集合として描いてきた。本稿が採用したアプローチは進化論的で、「進化論的ビジョンの科学的基盤」(Jantsch)とされる自己組織化の所産として全体を描き出すことを狙っている。

本稿において詳しく分析してきたグローバリゼーションを形作る諸プロセスは、歴史的に挙証できるものであり、その予測は、事後的 (post hoc) に、予想しなかった形で確認されている。例えば、主導産業部門のK波は、1000年まで延長される期間にわたって、基本的に予測されたとおりに経済活動の拡大を促進している。世界列強の台頭と衰退 (ロング・サイクル) は、大洋を支配する海軍力の集中度に見られる変動と良く合致している。都市化でさえ、世界システムの進化の三つの主要な時代のそれぞれにおいて、その強度を段階的に増大させてきたことを示している。それでは進化のこの形式は、一部の論者が主張するように、「結末が決まっていない (open ended)」ために、事後的にしか意味をなさないものなのだろうか。それともある程度は、将来の指針を与えるものなのだろうか。

制度論的アプローチは、長期的な時間を対象としており、長期的なビジョンを裏付ける情報量や知識量を要求する。「表1」に掲げた四つの制度的過程は、250年から2000年の期間を表している。通常の社会学者は一世代を超えるタイムスパンをもつことはまずない。これだけでも拒否反応を引き起こして当然だとは言えないだろうか。いったい社会科学というものは、これほどの長期的展望をもつことがで

きるのだろうか。多くの社会学者は、このように大胆で、文献的裏付けも未だ十分ではない主張を受け入れないだろう。その理由は、歴史的諸条件の中で事後的に跡付けすることはできるにしても、現時点ではほとんど観察不可能な遠い過去の出来事だからである。主体がドライブする諸プロセスの最小の「解像度」は、1世代　つまり25年から30年とみなされる期間　であって通常の社会的研究の枠を越える場合が多い。

長期的な社会変化に関する制度的・進化論的アプローチが、しばしば入り口のところで遭遇する別の批判は、それが決定論であり、したがって誤りだというものである。Auyang (1998:259)の有用な定式化によれば、決定論とは、世界の全般的状態に関するグローバルな信条であって、われわれの受け入れるものではない。決定論とは、未来、自由意志、および決定論的システムから成り立つような、世界に関する形而上学的な信条であって、世界の未来は現在の在り方によって完全に決定されるとする考え方である。Auyangは、決定論(determinism)を決定性(determinacy)と対比させているが、これは有益な対比である。決定性は、動的な特性を示すこともあれば示さないこともある個別的な諸システムあるいは諸プロセスに帰せられる局所的な特徴に関わっている。われわれは、決定論を哲学的立場として拒否するが、研究対象となる諸プロセスは決定論的な動的諸法則(deterministic dynamic rules)に従っている可能性がある、という立場をとっている。われわれはグローバリゼーションを「不可避的な(inexorable)」プロセス(グローバリゼーションの不可避論者と呼ぶべきであろう)だとする分析をしばしば見るが、これは一種の局所的な決定だということができるかもしれない。

ここに提示したような進化論的ビジョンがもつ諸概念のネットワークは、たとえばGiddensが打ち出したような厳しい基準を満たしている。それは、生物進化との連続性を示し、変化の明確なメカニズムを提唱し、そのメカニズムが進化的過程の局面区分をいかによく説明するのかを示し、さらには、世界史のより広い文脈の中で、このメカニズムの適用可能性を示唆してさえいる。もちろんそれは、世界史それ自体を説明するものでもなければ、未来の青写真を提供するものでもないのだが、いくつかの決定的に重要な過程の構造や、大規模な変化の背後にある法則性を解明している。

より具体的に言うならば、われわれの目的は、未来についての思考をめぐらせる際の補助手段を考案することだと考えてはどうだろうか。未来は不確実性に満ちている。しかしそこには予測に役立つような連続性と安定性の要素も潜んでいるであろう。例えば民主主義国家では、選挙は予測可能な規則性を持っていると言って良いだろう。民主主義的な政治システムは、このような事柄をある程度満足しうるレベルにまで制度化しているのだから、それも当然なのである。同様にグローバルな諸制度の台頭は、グローバルな環境をより予測可能なものにするであろう。

以上を要約すれば、グローバリゼーションを、ローカルに共進化する動的な諸プロセスの集積(cluster)と見なして、その挙動を観察、図式化、分析する作業が有効であろう。ローカルに共進化する集積の所産は、よりいっそう拡大する制度化であるが、それは不安定、不規則、不確定を排除することにはならない。グローバリゼーションは、その動的な法則性、初期条件および時間経路が肌理の粗い記述を許す程度には特定されるような決定論的な諸過程かもしれないし、あるいは多数の確率的な過程の配列かもしれない。だとすればグローバリゼーションを、グローバルな(成長曲線型の)学習過程の集まりとみなしてはどうだろうか。(その一例としてはDevenzas and Modelski 2006を参照)グローバリゼーションの諸過程は、それらがうまく特定される限り、予測のための好適な素材となってくれるだろう。その場合の未解決な一つの問題は、グローバリゼーションを、その四つの過程のすべてを捕捉しうるような仕方で、グローバルなシステムの特長として測定するにはどうすればよいのか、という問題である。

(注1)『Foreign Policy』は、2000年から毎年、Foreign Policy Globalization Index (www.atkearney.com) を発行している。そこには、世界人口の80%以上を占める62か国について、そのグローバルな関与の度合いを測るさまざまなデータが掲載されている。2005年におけるこの指標の第1位はシンガポールで、アイルランド、スイス、そして米国がそれに続いていた。中国は54位、そしてイランは最下位の62位であった。この指標は、それぞれの国について、経済統合度、個人的接触、技術的連結性、政治への関与などを数値化して順位付けしているが、グローバリゼーションについてのグローバルな共通尺度がまだできていないことは明らかである。

(注2) グローバリゼーションは、Modelski (2000:43-9) において、近代世界システムの進化という文脈の中におかれ、Devezas and Modelski (2003)でさらに詳細に述べられた。

(注3) このことは、ホモ・サピエンス過程の開始を7万年前、世界システム過程の開始を5000年前とすることをも含意している。

(注4) グローバルな政治進化の各期間は、学習アルゴリズム(すなわち、より高度化されたLewontin-Campbell的発見法:g-c-t-r:形成 協力 検証 再形成)の作働事例となっている。さらに、それぞれの期間(主体レベルでの入れ子状で自己相似的な過程の中に見られる)四つの長波によって駆動され、それぞれの長波はこのアルゴリズムの中の一局面を表している。これは、世界政治の「一般理論」ではないが、トランスフォーメーションの中の決定的に重要ないくつかの過程の説明にはなっている。長波は、グローバルな政治における規則的なパターンであるが、進化的過程としては、反復する循環過程というよりはむしろ変化を描き出している。その点については、とりわけThe Evolutionary World Politics Home Page(<http://faculty.washington.edu/modelski/>)を参照のこと。

(注5) 「進化的学習」とNorbert Eliasの「文明化過程」の概念との間の関係については、研究してみる価値がある。

【参考文献】

- Auyang, S.Y. (1998) Foundations of Complex-System Theories in Economics, Biology and Statistical Physics, Cambridge: Cambridge University Press.
- Devezas, T. and G. Modelski (2003) "Power law behavior and world system evolution: A millennial learning process," Technological Forecasting and Social Change, Vol. 70, pp. 819-859.
- Devezas, T. and G. Modelski (2006) "The Portuguese as system-builders in the XVth - XVIth centuries: A Case Study on the Role of Technology in the Evolution of the World System," Globalizations, Vol.3 (2)
- Friedman, T. (2000) The Lexus and the Olive Tree: Understanding Globalization, New York: Random House.
- Giddens, A. (1984) The Constitution of Society, Cambridge: Polity Press.
- Held, D, McGrew A., Giddens D. and Perraton J. (1999) Global Transformations: Politics, Economics, and Culture, Stanford: Stanford University Press.
- Held, D., and A McGrew (2000) The Global Transformations Reader, 2nd. ed. Cambridge: Polity Press
- Jantsch, E. (1980) The Self-organizing Universe: Scientific and Human Implications of the Emerging Paradigm of Evolution, New York: Oxford University Press.
- Modelski, G. (1999) "From Leadership to Organization: The Evolution of Global Politics," V. Bornschier and Ch. Chase-Dunn eds., The Future of Global Conflict, London: Sage Studies in International Sociology.
- Modelski, G. (2000) "World System Evolution," Denmark, R. et al. eds., World System History: The social science of long-term change, New York: Routledge.
- Modelski, G. (2003) World Cities: 3000 to 2000, Washington: Faros 2000.
- Modelski, G. (2006) "Ages of Reorganization," Nature + Culture, Vol. 1 (2) June.
- Modelski, G. and W. R. Thompson (1996) Leading Sectors and World Powers: The Co-evolution of global economics and politics, Columbia: South Carolina University Press.
- NIC (National Intelligence Council) (2004) Mapping the Global Future, Honolulu: University Press of the Pacific.